



10 9 8 7 6 5 4 3 2 1 0 JAPAN

金示

天
得
瓶
仙
蛙
奇
錄

卷之二

東都

爲永春水補綴

第二回

初音を索て主僕奇遇の里ふ到る

曉音と燻と老嫗舊過を懺悔す

休題再説飛鳥前虎王ハ不意も香炉の山中ゆく追隊の夥兵等み
柱らゝ姫と吳羽と見失ひ那首這首と索りゆき絶え景より見え
ぎまば心頻ふ焦燥する虎王ハ稍帳然と獨心ふ思惟す恁る危窮の
折立と姫うそ索ねまづんともるとも容易と云ひ乍るべくとぞ
索んとく。這頭ふ時と移りて嚮の追隊の新手を加へて再び近づ
来らん。余ぞりよく難矣うべ。鬼す角すも山と超へ便宜の方へ
奥方と一旦躰しまひせく。然して後ひ姫うそも吳羽ひそも索んと

13
3101
2

昭和九年
七月二十三日
晴末

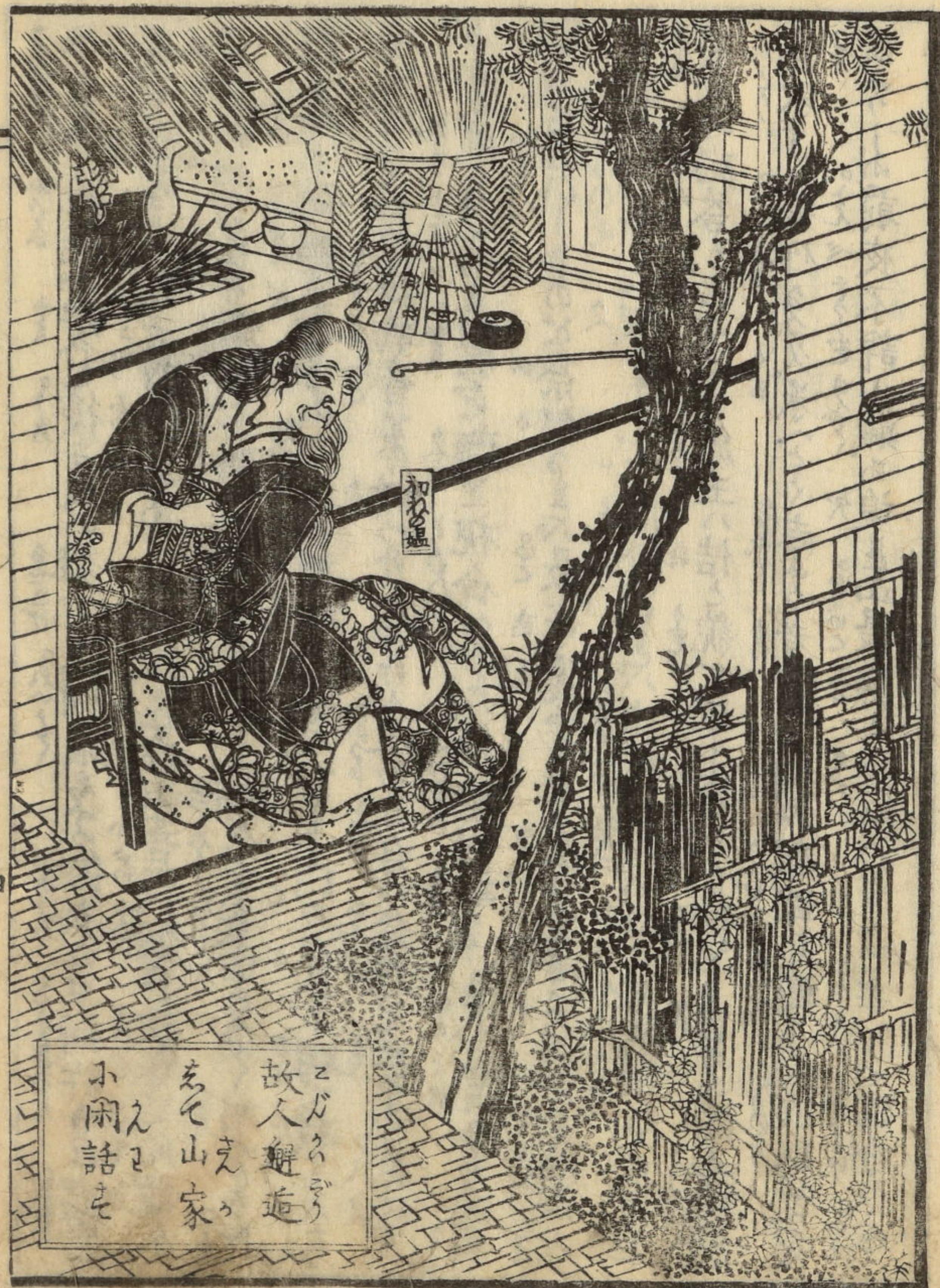
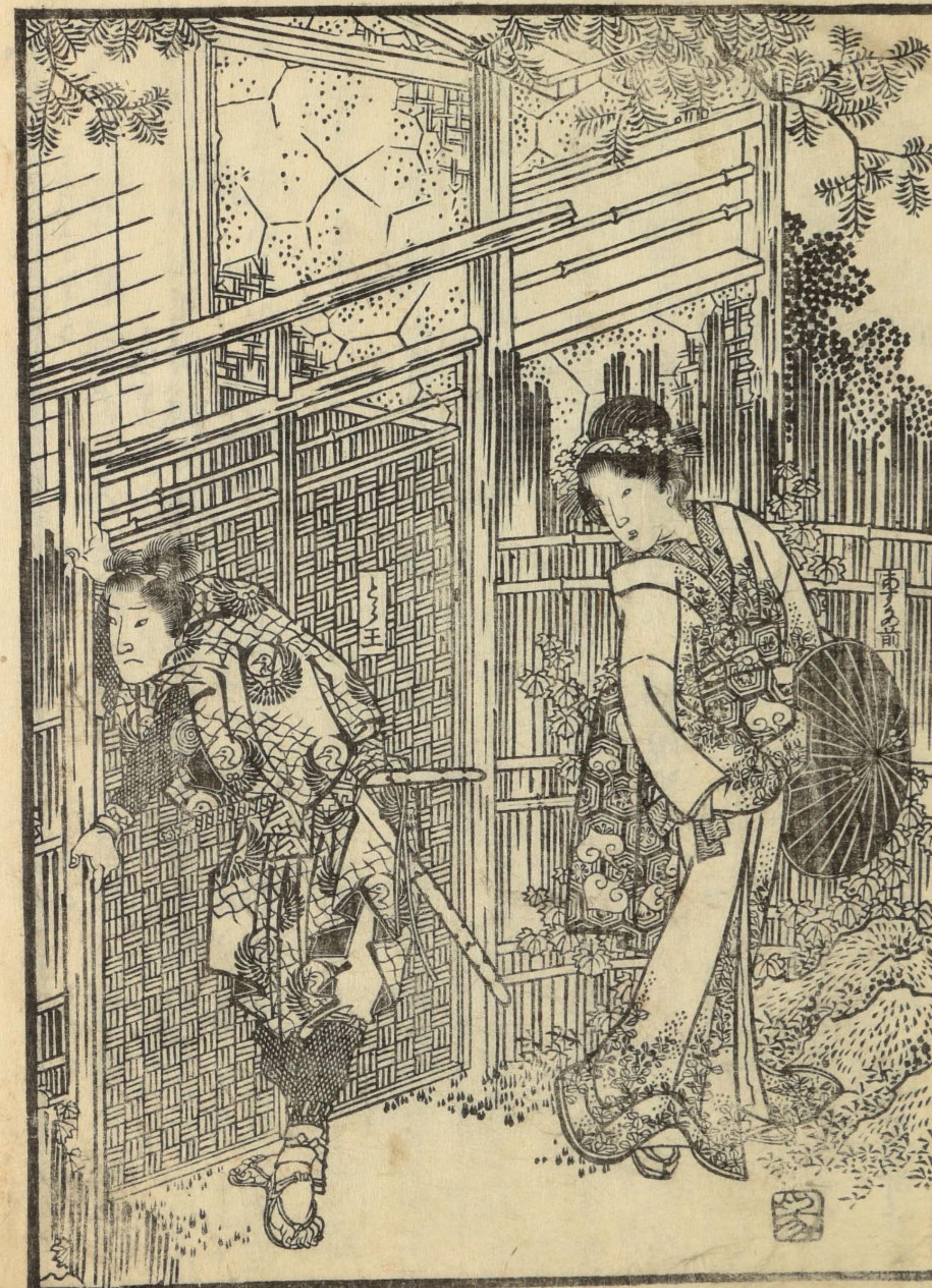
憶ふ心と飛鳥前ふも。緯云云と听へゆげ。頻りに諫め。慮りて燒くたま
嶺と傳ひ寂莫なる谷を踰て左半の方へと往や。どふまくとも暗き崎嶇の樹間
躱ふき月も西ふ頃く運命と船程。即ち主従。駕は旅路。吟あく九折る
山。山を躋み。千尋漢表を凌ぎ。躡み。一點半空ふ聳。雲を吐き。
霧を蒸。凌兢と警ん。見るふ魂消肝を冷し。弱る心を取み下り。
蹠蹠々て行程五六里。許も走り。只視。西北とも。聚した方。遼
入烟。り。を認。り。是ふ聊力を得。主従。只管。足を速め。行。更。幾
程。うづく。暁雲峯ふ。穏。渡り。茂林。と。群。慈鳥の東西。小
飛。ち。天。朗。明。け。浩。然。所。前路。方。草。荔。の。小童。
歳の程。十三四。うづく。竹。り。造。り。編。籠。と。の。脊。か。うち。擔。げ。
腰。ふ。利。鎌。と。帶。う。二。三。個。連立。俗。諷。調。て。來。う。會。け。虎王。へ

よだ者得ら。と行違ひ。まみ。找。り。と。喃。里。の。こ。と。べ。等。ふ。向。ハ。ま。欲
あき。吏。そ。ひ。と。什麼。此。辺。り。何。と。り。る。麓。ふ。り。る。便。路。も。わ。い。バ。
疾。い。教。く。得。さ。せ。よ。と。最。懲。懃。小。同。係。と。が。頭。ふ。壇。の。糞。措。う。俚。童。の
を。中。ふ。一。も。年。嵩。ふ。く。怜。制。氣。う。る。傍。ふ。よう。と。主。従。と。左。視。右
視。う。不。審。氣。ふ。かん。身。等。ふ。嬌。態。旅。客。と。し。も。忍。ま。う。せ。と。這。近。鄙。
見。も。馴。ぬ。衣。を。え。着。う。る。近。屬。灰。ふ。噂。を。听。く。ふ。程。遠。う。輪。笠。の。城。ふ
直。冬。ね。一。の。指。筆。り。京。都。の。兵。士。と。引。受。て。戰。ひ。最。中。う。り。け。り。よ。一。慄。る。紛
き。ふ。落。人。とう。り。の。ひ。一。ゆ。り。ば。や。开。ハ。左。ま。き。右。も。ひ。と。這。所。ハ。因。幡。の。國。
あ。く。義。作。う。久。米。の。南。條。へ。山。路。を。踰。る。閑。道。ふ。那。ふ。見。る。一。卵。と。奇
遇。の。里。六。の。う。り。其。里。稍。尽。の。白。屋。ふ。初。音。の。媼。と。喚。と。う。心。怜。制。老
媼。ひ。う。かん。身。等。便。宜。と。見。や。ん。と。う。先。那。老。媼。ふ。相。譚。て。行。ぬ。と。

止ろとも縛の宜ふ就々と言ひて空うち仰ぎ叶鈍矢や俺を
 益うき更ふうらうりひく。紅輪のも甚く昇る。ぞや。可惜朝草筋
 手間を費一けりと咳き。衆來よ來よと喚係呼懸き崎嶇
 走去りぬ飛鳥前ハ鄙童が不向語と听毎ふ頻り小胸のうち驥
 がまく心遣うき限りうるを然ハぢうぬ面色。那等が遠く往過るを。
 視送り果て哺虎王俺们が形容の鄙少最も似氣を失ふ足曳の
 山柴樵る賤の童の眼ふき立て斯くの咎めみ一くるうむら況く
 人目の茂うるん往還不出さん更ハ心苦く影護り。今。の鄙童が
 辞ふつき里稍尽うる。媪とゆふんふうち相譚べき便宜を得べ次姿を
 寂と術もあり。ゆん。你の意奈何ぞ。と宜ハ至る。虎王が須臾
 首とくびけて御誕寔ふその謂なり。唉の中ふ刃を含ひ憑く

気き乱世ハ老嫗とく由断ハまねど且疾く那首ふ赴きて
 初音とゆんを訪試ミ余一後ふ鬼も角も縛の宜ふ任一元
 卒とそ先ふ立やどぶ飛鳥前も後方ふつまく。那俚童が示教る隨意
 里稍尽うる卒行て召す。果し。一箇の白屋。是うん刀自が庵
 きべ。蓬の檐小菖蒲け。茅萱の庇斜き。柴の樹牆結ぐる
 た。門の扉ハ松の鹿皮を編著て刑竹の半削。うみて列ね蔽繩。りそ結び
 たり。亦脊門のうと思。き。小川の流清。うふ。小石数疊。け。人東
 西洗ふ。充設け。や。尚持裡面と覗窺。は。二間許の竹椽。お蚊遣草
 積。出居のうと思。畠五ひう。六ひう。許も舗。うけん。是
 よ先ハ見え分ねど奥。う。一院も。納戸。か。所。呼も。づ。時。ふ主の
 老嫗。う。歳齡ハ小動の五十のう多と。幾。超。い。面。皺。の波え寄せて

仙蝶奇錄卷之二



一仙蝶奇譲卷之二

半白三尾花が髪と後まゆを拂下り繡箔をす鮮衣の中刺許さむを裾と
長く着みてうつぐ持佛棚ふうち對ひ左手ふ菩提樹の数珠と几操り。
右手の細ちうる鐸うち鳴らし口のうちあく佛名と幾回とみく唱てす。打
視る所の殊勝氣うふ主従へ稍心安堵らをも門の扉か一明て找ミ入ら
まくをうけ。這物音をや听つけられん主の刀自ハ念珠を止めく見返り
きみの飛鳥前と思ひぞ顔と視合ひて俺娘が速うき今宵うゞぎ處
らどと思ひてのと奈何うまび最奇麗ちうる衣え著てつゝ見馴な人
ざぬと誘立てハ坂つまごと問答ひとバ主従ハ竊の目と目と視合との
呆きて応答も出でうぶ虎王ハ信と貌を正す家刀自何と言ふやん俺们
鳥取よう。美作う久米へも志うる者うが馴れ旅路を遠く物取ひだ
出うふ。前夜不許山賊不追き山最深く惑ひ入マセと辛ドて暗分り。今

稍這首ゆ吟ひ來まう素そ俺们ハかん身ふ由縁ぢる者ううね、最心う
更かううと。雲裏時庇の蔭ふうりとも憇せまううと。よお見思でハん。と
乞はまく刀自ハ兵きも顔ふ飛鳥前主従せ左視右視くうち含咲。偕ハ旅
ゆく方ざまうり。斯言ハ先礼をども吾侪ハ一個の娘のゆりて年形え
容貌丈夫の女生ふ毫違ひねば老の疲眼ふ視誤りと坐ふ辭を係ゆる
嗚呼う者とや思ーケン最面うくを修るゝ常言ふも旅ハ憂愛りのとひ
ゆうせ。余る殃危ふ遭ひゆひて終夜山路ふ吟ひゆ。餓も勞も為ゆひけれ。片山
里の侘僑居ふ烟も細き賤家の悒憤をどふ歎トとうう。且疾く這方へ容せ
ゆ。と坐うち拂ひく座を設め虎王深く歡ひく甦生し心地う飛鳥
前と撫勞て俱小一院ふうち上るゆ。爐へ用炉裏ふ鹿乃柔折焚て貞節
焼の黒茶碗ふ汲う煎茶もまた涅きと茶筌のゆく泡さう。昼餉の

料中と整へおひの焼飯を六ヶ七ヶ歯乃至の葉ふ盛りと赤口一折敷ふ
うち乗て卒とく二個小薦りう心せきうき主あらか飛鳥前も虎王す
悦と演恩を謝して須臾ノ程の那飯を主従俱ふ喫尽其、媼ハ山茶を
汲えみどり大さうじび管待け。折しも吹來る風ふ連々や持佛
棚の方と思へく蘭奢の薰り馥郁う飛鳥前ハ訝々静に
方を視返まば佛檻の中央の貞松院殿信操大禪定尼と金字をりと
影著する靈牌と楷居すが云什麼りゆく驚嘆しき心不思ひき
や。悒憤羈旅の心ふ住甚ぞ忘る。等闲ふ未だりふ
正しく今日へ亡阿娘うゑの命日をひづけり。开と思ふも戒名さへ
かみ下阴阳の下ふ僑て余所の回向ふ遭りゆ。抑是う名香ハ曛昏と
號ク。阿娘君の祕藏為ゆひて俗ふ牢う。言物うふ甚麼しお爰ふ

傳へけん戒名とのひ香とのひ且ハ老媼が衣服の繡箱左ゆも右ゆも訝しけり
と思ふそろと虎王ふも縛如此々と耳き示し。俱ふ主ふ對ひく言ひ。侍
言ひ何とゆうん憚うきふ似へども刀自ハ奈何う故をひく遠香を
所持あゆめうん俺们聊識よ。ひづく緣故を听まひ。争々と信ゆふ
向くけりまく主の媼ハ駭然よ。首をりこげ。這名香の薰りを咎め
尋問あふん身等を。何内國富山家ふ由縁の仁ゑく。在まゐ吾
併も過ふく其頃ハ富山基國公の内君ふ仕まひせく岬と喚き
者ゆぞゆる指折バ三十余年昔ふえつ懺悔たま。由縁の人とたゞ
くふ裏まだ顔を身のうゑを報知も今更あらうの杜きくくとて恋
衣染て悔き初紅葉嫩樹を半折風流士のなりくこうく契りつゝ
入視の間ヒ哉遍う踰てひづ夜の情の滝と有身あら縛發覺て郎と俱ふ

縛らき命も召さうべうりしを。惻隱らき内君の種々まことに寛ひて
故く暇のうとを一包の金を副て配分賜ひ。這香とぞ大明神より
船來。俗ゆ。辛う。物ホーラウ。今別きて。さうく。何時と逢ふ
廉と定り。うな縁。ふーも薄き主従。が後の儀と見よ。クーとく。罪ひ。吾
脩と憎し。思へ。内君の。かん慈愛の賜物ハ須弥。う
高く。蒼海。よう。深き。恩と伏沈。泪ふ。首も。ひげ。得。ざ。疾く
立ねと夥兵。等ふ。追立らきて。住馴。館と後。不身の咎と送ふ。詫り
詫。重く。郎と共。内那首。這首と漂泊。うち。産の氣。つき。生落せ。人。女子
ゆ。名。其二面と喚。其頃。听バ。同月同日。内君ゆ。姫君と
設。ひ。と風の便の。ひ。の。ミ。其後。障る。更。ひ。く。契。郎。ふ。引。別。甚
積り。く。身の。憂。娘一個。セ力草。生立。まふ。鄙。う。心操。さへ容

貌え人並き。ゆ。憑り。奇遇の里。奇遇。ひ。娘。う。ひ。そ。這里。小落
き。十。も。う。も。三。稔。ゆ。や。う。ね。う。ド。簪。ハ。素。う。補。家。の。浪。客。志願。う
き。去。歳。の。冬。家。出。せ。今。小。飯。う。娘。二。面。も。其。側。月。よ。月。徑。て。見。ね。う
き。酸。物。好。ひ。癖。つ。く。折。々。痛。び。痞。の。惱。み。と。也。這。月。が。臨。月。う。か。此。休。ふ。と
打。捐。措。ハ。產。臨。期。て。難。治。う。ん。速。莫。這。邊。ハ。片。山。里。の。医。師。と。ふ。と。も。心。小。住
ま。僕。僕。往。途。頃。京。都。の。下。潭。泊。來。り。終。驗。者。り。這。隣。村。み。杖。を。ま。そ。
民。の。病。苦。と。救。ふ。う。众。バ。一。回。護。法。と。受。ふ。か。或。ハ。一。日。或。ハ。七。日。永。き。二。十
も。雪。一。き。一日。と。限。り。快。復。せ。ま。く。人。の。う。ど。と。ぞ。且。其。境。の。隔。る。者。又。縉。紳。方。が。多。く
ど。の。自。卒。行。ざ。く。其。者。の。身。か。つけ。一。衣。服。ゆ。も。ひ。れ。帶。ゆ。も。ひ。き。携。へ
往。く。祈。禱。と。受。ふ。夫。ゆ。も。驗。ハ。ひ。り。と。ま。ん。吾。脩。が。娘。ハ。一。七。日。祈。し。く。驗。り
ひ。う。ん。と。り。ゆ。ぞ。去。る。日。よ。那。所。ふ。つ。ス。今。宵。ま。を。う。満。願。の。劫。驗。奈。何。と

俟るの心懲ハ阴阳と徑りのうと忘々隙うき故主の大恩争報ゆる時
 りやむると思ひへと詐憑ゆく去る明徳四年ありけり畠山の御家
 驚動基園公久蟄居ましく内君ゆれ最期と聴ふ曾も塞ぐく何
 詮術も奈末与美の甲斐うき這身を悔ひの寧ハ後世を吊すを貞介
 一の報恩と毎月のゆ命日ゆ老か似亂色小袖も世からずと死賜り一昔と
 忍ぶ吾俯が赤心筐の香と燻をとば現ふ名香の奇特也。まど春早きふ鶯の
 這首の擔端ふ鳴初る故誰言ふとく掉号し初音の嫗と呼號り有右とも
 思ひ絶ぐて尚遐途と便と听ふ吾俯が娘と同辰ふ生きの姫君ハ直冬
 ぬふ嫁しゆひて猶恙く在せよ。俗の取沙汰の憑くくむすびの
 くふ身と恥と訪をもん便宜もくく虚ふ立日の最早く去歳ふ今歳と
 きりやどふ幽ふ听バ左典厩直冬。御企吏頻りゆく。這所より程も遠

くふね輪笠の城小楯笠り軍夾と阡陌の風説あひとゆき漢子うき懲
 時を走かりりく一臂の功と立何んふ世ふ女子やど無端物とぞと
 身を悔て那方の天と眺望のみ亦詮術もうゑ折う。思ひがけども柴門と
 呼仰ゆひ。君ちのぢん名ハひまざ知らねども夫ぞと察。うき世ふ
 賤しき更ゆもりと吾俯がうゑも斯またふ報知うとを。今ハ一もあん
 疑ひも仰う。ようち明くゆひねと赤心面小顕。うき説尽し。うき長譚を听
 ええと嘯家刀自かん身が今。の物語ハ一々ふ曾ふ織り。昔床と思ふ
 言ひうゞく妻を畠山家ふ娘ふきて足利直冬の家ふ嫁し。うき飛鳥と喚す者
 ふくらむ薄命ふく親ふやと運命尽て家を捐。悲落人となりゆるも懷
 胎胤と世ふ在せよとの良人の遺訓と守る。ゆゑとをうりふと撫子の一個の

處女ハ視失ひ迹ふ残り一柞木の這身をうりて死絕矣絶よ
 玉緒の世ふ存命乞意ハならねど尚ぢやめくふ孕子の疑とうりく
 捩うり。強面りのハ浮世ぞくへと口説復轉沈じ憂ふ縫繻ハ
 うりけり側听せ一虎王も思ひ乍り愁嘆悲泣と慰められ主の
 媚ハ俱小臉と屢瞬。猪ハ憶ふ毫感を吾体が仕内君の御腹の産
 うひれ姫君ゆくど在しける斯言んハ惶けきども嚮く訪來のいを坐ふ
 見違へまのむらまを娘ふ似きをかのじのまゝ同月日か産ゆひ今又脊一
 有身のふハ過世ぢやまき主従の尽ぬ縁しぐ竹りさん。想ハ和君の上も
 吾脩がふるも打明く今を報ふ故主の大恩娘が飯らば来由を報知て
 母子が力の及ん程ハ躰くまのうせん御意易く思へりをと最も節き
 老嫗が辞ふ感悦へて飛鳥前虎王も稍力を得て亦ひらうて

名告をあら主君のうゑを左右と只管憑み听へける案下媼ハ四邊を
 視まへ。這辺ハ都と山懷の隣も遐き白屋うまと世を潛びの久ん
 や。よき僑居ぐ竹きども輪笠の城へ程遠うねば追捕の沙汰も
 計り。縦余支えをあわせよ。うまうの端居し人視立え思ふ
 みん思黒くふゆきども奥よりする小院ひも。須臾ハ那所ふ起卧して
 長途の勞きを休む。卒と先ふ立くも件の一間ふ誘ひ三個
 育一膝突合せ隔たりをまぐ否上あつた昔の主従が再び環巨山の奇
 遇の郷も虚うべに送ふ憂愛と相譚やぶふ赤心深き管の根の長き
 曙も傾き下肺ふうりふけり。浩程ふ飛鳥前ハ媼が好意ふ張詰
 心暖一故ゆやうりけん。俄ふ胸あさりこひ瘡ふ叫と一声喚ひく。
 更ふ人吏も矢へねまぐ凶苦くみゆひく心地死ぬべく見ゆふぞ虎

王ハ吐嗟と在り。媼侶俱小打駄きく或ハ脊せ撫腹を按て左右と
看病まつたきども。おん惱ミ頗リあく。やとく危く視へ更バ虎王
のよく焦燥く。藥やあると行色をうち振ひ搔探をども。夜前烈しく
戰ひて。何地へ落しけん。素る薬品ハひづりけり。兔角を間み
日ハ晝て夜も稍二更小及ぶまぐ。飛鳥前のおん病着聊も鎮らむ。
媼も最々困じ果て又詮術もぢづりしが。思ひ当り一更やぢうけん。
虎王小對ひく言ふゆ。儲苦々と容體。恁く速く瘥りかへド。
遮莫這辺ハ山懐の買茶え心ふ任せど。況て医師ハ竹うねど嚮
ゆも既ふ報知まわらせ。隣邦うる修驗者ハお効最灼然きりと。
這辺ぞ帰依せぬ者もたゞうど。余ども招きふ。応じねば今を這首六
迎へど。因て憶ふふ飛鳥きの。おん身ふ親しく着ひ一衣まき

帶まき。吾脩那首へ携へゆれて平愈の祈禱を受ん。余なりの驗ハ
りべ。和殿の意奈何ぞやと問ひて虎王一譏ふ及ばざ。开ハ宜く意
づき。老うる人を使はんハ最心き業か。あると余バおん身を勞
きん。先々と言ひくも。那行色を取ひ。這裡ゆ。夜前まが。おん膚ふを
かへ。おん垢付の草衣と些の沙金も入まび。是ゆく締の整ひ。
祈禱の料ふ宛てよと示すを媼ハ受採て。开ハ心得て。往る。那修驗
者許赴く。女兒二面ふ來由を報知て。且疾彼女を販きん。ウセ。お
時宜ト住せん。吾脩が飯り来んまぐ。ハ萬叟お心せつけ。おん身宜く
看病ゆ。湯乞ひゆ。圍炉裏から。倘物ト宣ひ。粥も那首
仕う。余バ疾往て。疾飯らん。小腰檻取り精悍。脊門より
出で駆。山きり。虎王ハ詮術を。まき刀自が辞と心遣ふ。衣え金さへ

齋くわ。い。まく。や。まく。や。まく。や。
齋くわ。い。まく。や。まく。や。まく。や。
世よ。大だい。徳とく。權けん。者もの。名な。歴れき。を。參さん。ハ。そ。の。実じ。み。一い。企き。と。這は。首くび。へ。枕くし。を。曳ひ。き。
奇き。と。示し。一い。妙めう。と。頭かぶ。一い。專せん。々。愚ぐる。民みん。と。惑まど。ハ。ち。似に。非ひ。修しゆ。驗れん。者もの。で。あ。す。ん。ゆ。夫お。夫お。
老お。も。憑の。一い。う。さ。左さ。や。ひ。り。ん。右う。や。ゆ。り。ん。と。憶お。六ろく。胸むね。も。易た。う。る。心こころ。を。
苦くる。し。多お。け。る。懲こ。り。一い。程ほど。ふ。飛と。鳥とり。前まへ。ハ。苦くる。痛いた。些すこ。鎮おさ。り。け。ん。心こころ。神かみ。と。も。ふ。疲つか。
勞は。せ。お。下さ。ぐ。も。や。く。睡ね。眠ね。ま。休やす。ふ。虎とら。王おう。ハ。稍すこ。心こころ。安堵あんと。て。斯この。べ。次つぎ。弟弟子。ふ。癒いや。
少すこ。ん。夫お。小こ。就す。て。も。主お。の。媼めい。の。出で。行は。一い。時とき。ひ。ま。今いま。ふ。飯めし。ら。ぬ。の。ミ。さ。う。ん。
俺われ。よ。先さ。ふ。去は。き。ん。と。言い。ひ。一い。女めの。児こども。も。よ。ま。さ。来く。庄いわ。片かた。山さん。里さと。の。吏り。ふ。一い。ひ。ま。さ。と。二ふた。
隣となり。邱おか。と。き。途と。う。ざ。と。も。な。や。子こ。二ふた。の。頃とき。う。ざ。と。沙汰さわざ。う。れ。ハ。奈な。何なん。ぞ。や。と。
喰く。顔おほ。へ。ぢ。う。蚊か。を。打拂うつ。ひ。く。見く。え。く。宵よ。衆しゆ。の。ミ。ね。づ。ぎ。り。ー。が。更また。
行は。ま。ふ。蚊か。の。多お。き。俺われ。ハ。鬼き。も。ひ。き。飛と。鳥とり。さ。る。ふ。卒そつ。蚊か。遣はな。り。ま。ま。

せん。と。囲い。炉ろ。裏う。ふ。生い。柴しば。折ち。焚ひ。て。出だ。ふ。一い。刀と。自じ。グ。音おと。信しん。と。帳あ。然ぜん。と。く。俟ま。り。
折ち。一い。も。倉くら。卒そつ。ふ。外ほか。面おもて。惣そう。急いそ。一い。折ち。扉と。遣け。戸と。と。感かん。足あし。破は。り。く。忽うつ。地じ。込こ。入は。る。
駿す。の。軍ぐん。卒そつ。中なか。ゆ。も。這は。隊たい。の。頭かしら。人ひと。き。り。け。ん。小こ。具ぐ。足あし。ふ。小こ。手て。臚らふ。當あ。して。最さい。り。
や。一い。打拂うつ。ひ。く。找さ。み。出だ。ふ。声こゑ。あ。り。立た。休やす。俺われ。と。視み。忘わす。ぞ。ぶ。名な。告ご。ぞ。と。も。知し。り。
つ。う。ん。前まへ。夜よ。香か。炉ろ。の。山さん。中なか。ふ。く。汝汝。と。半はん。甚ひ。く。戰たたか。ひ。ー。と。死死。不。意。も。木。の。根ね。ふ。
丘おか。突つき。草くさ。の。茂しげ。ふ。陷おち。り。く。檻はな。の。獸けもの。と。圍い。ま。う。你あなた。主お。僕くわく。と。走は。ら。せ。ー。こと。
遺のこ。喊う。ち。き。う。り。け。り。得と。藤とう。五ご。郎ろう。二に。郎ろう。成な。美うつく。が。再な。び。圍い。ま。う。這は。屋や。を。伏ふ。籠とう。の。
鳥とり。ふ。異い。う。と。其その。名な。ハ。知し。り。う。安あん。井い。虎とら。王おう。雌め。鳥とり。侶とも。俱とも。綁しば。縛しば。と。疾め。受うけ。も。や。と。
ぬ。猪いの。首くび。俺われ。们ひと。主お。從つ。を。陷おち。容ゆ。ん。と。斯この。ま。ふ。熟じ。も。計く。り。の。る。う。ん。ぬ。う。ふ。

りりと悔ひども詮術ひるべを更きれバ。一旦這場を落トキムトセ。
 憲ノシトキア侶俱ふ死出のちん供モケシト憶ふ心モ奥方モ
 締如些々シト听得ひげ心惡く在さんガ脊門より出て溪間の嶮を
 東の嶺へと落キせり。小可ハ這歎を宣ヤズル追捐シ後より追属
 せらんと只管勧めテキモ六飛鳥前ハ病苦のうタホ又一層の
 吉を倍て立チモキモ弱竹の杖ミ身支力ムク。寛束ムクモ裏手
 よリ深山路さく落キ夫道まみと五郎二郎が激しき下知ハ
 賂兵等格呑と叫ひ。競ひ係ラセ虎王矢庭モ蒐隔備ハ成義
 ビミンカ。前夜の半並モ懲モセ再び寄セ。夏虫の火虫モ齊一
 多く勢一度モ係ミト喚ク。抜晃ク。双の電先モ找ミ。賂兵等ハ
 或ハ真向腰車二段三段モ砍ラセ瞬間モ二三名枕モラセ休

た。忠義モ凝る太刀風モきざと突て許多の軍卒足急
 崩ミ漂ふ。五郎二郎ハ飛鳥前モ只顧モ搦捕ルト為て
 けよ。虎王四方ヘ眼と配リ。一個モ裏手ヘマモ更ニシテ
 找ミ生と。虎王防戦モ。更半胸ナリ。飛鳥前モ既モ有
 落延。ハんと憶ふ。モヤ戦リモ是モシト豫て期し。アキラ
 蚊遣の為ゆ。折燻。生柴。火のうち。一頃。障子紙門と仆
 降。火華拂ひ。周章大。火燄。火散。飛
 回り。屋棟。高く燃。是モ驟く寄隊の軍卒頭の上
 モ。とうら喰て烟の中。紛入り。潛り。抜ク。脊戸口。東の嶺
 ヘ。アキラ。飛鳥前。のぶん迹と瑞々を追う。

第三回

玉石相似一夫一婦と害を
一級不明赤松赤松と争ふ

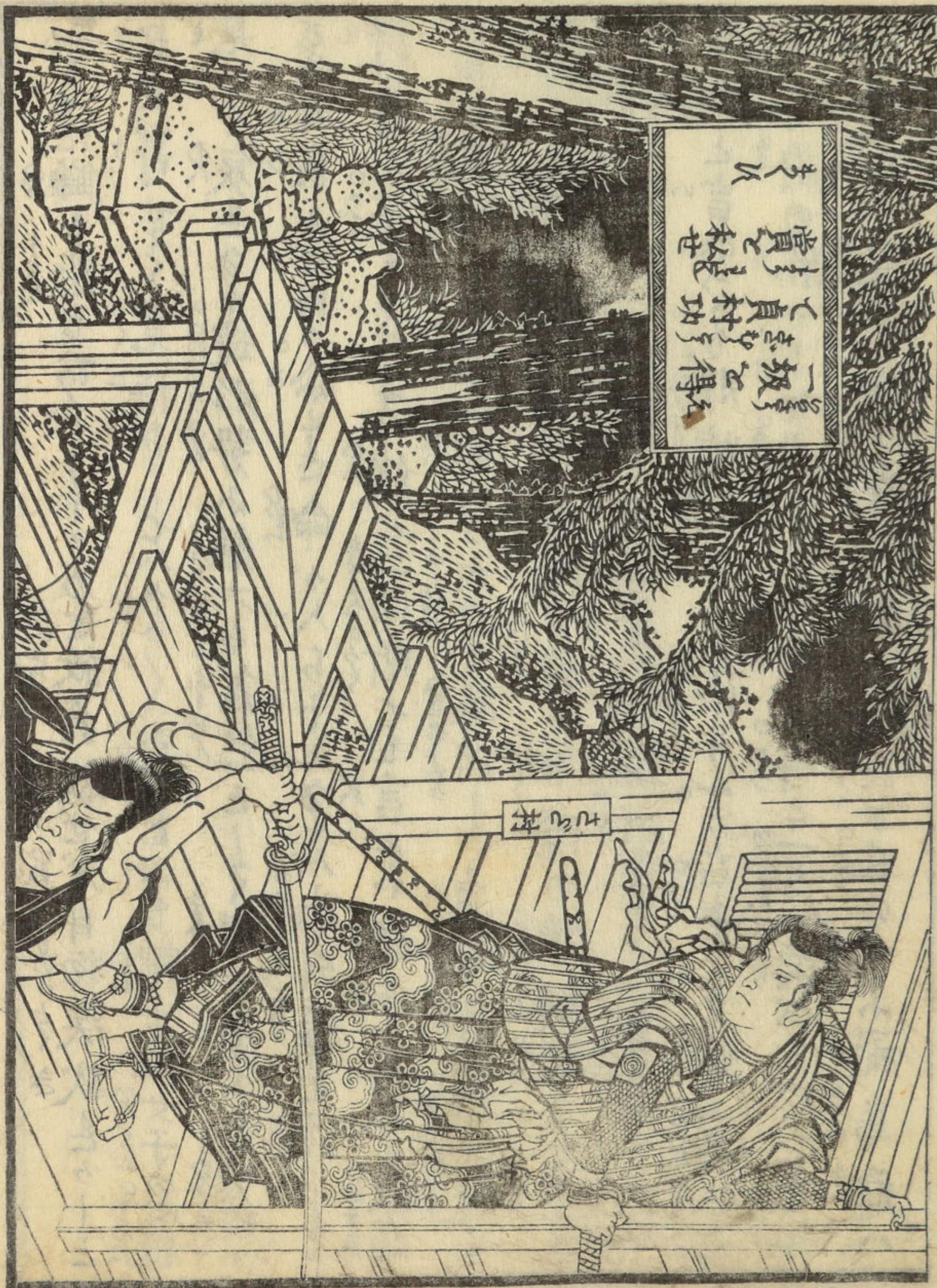
什麼這山ハ因幡羨作播磨の三國ふ蟠り嶮山嵯峨と一々空天小聳へ連峯崎嶇とく雲裡ふ衡ふ森々う喬樹ハ跨りて蒼龍嶺ふ飛翔するうと疑ひ翻々う風葉ハ散乱し。群雀雲ふ朝夕と怪しき梢を鳴き松風ハ海上ふ到るの声なり水谷ふ響ひ山は動きの音をうる余バ山樵木客も恒ふ往還の途ふ惱ミ石を戴る牛薪を負ふ馬も這首ふひうそ歩を愆ち蹄を傷損等を以て人民懼て這山を駒顛の岑と呼做り巔ふ一箇の十字堂ひりて地蔵菩薩を安置し。宝前より長途不惱ミ或へ山路不往暮う。圓圓の修行者をどの一夜を明と便宜とを此辺りへ殊更ふ

樹木間かく生茂々々昼ごも暗き深山路うるふ其夜も既に更闌て曉ちるゝ天の色葉越ふ洩て影薄き月を明アふ一個の盤齋者眼凹面鬚生て月額の迹長く伸しが最嬪娟ふ臘蘭う三十許の美女と小腰ふ抱へ走り來り四下視まへ。那十字堂の辺りゆすと推居つ。哼と息つてゆよ女性よ。懸山深く伴ひ来是。泣ばとて叫ばき。傍の外ふ誰女荅ん余ともかん身は殺害不巧い。胸を鎮め。宜く听ね。問ひ知りかん身を輪笠の城ゆく討死せ。直冬渾家飛鳥前女兒韓衣侶俱ふ城の圍を砍抜て這所不忍。獨熟支せざきく。這山中で鍛貫する。鋼鍊と掉弓の鎌六。脣の下が乾ひぐ故媼奴を賺もく搔きひし。かん身が斯く在る

あ。韓衣姫の忍び居る所も大きき知りてぞあらん夫も听く。ア
ア。あん身の膚ふあらうと着て秘排く探題の邱。今一品ハ紅
雀の鏡と見抜。眼ハ曇ら。媛が在を招す。うな。笠とけ
スケ。二品と術よく。咱ふ遞与。不の字を言ひ。二尺八寸
大刀ハ俺腰ふあり。応ひとりが生死の境。卒々と問逼られ。飛鳥
前ハ。この唯うち哭て居ゆひ。左とも右とも。賊手の捕。存生
ぐ死命。身の薄命ハ詮術。憶ひ絶。首せり。猪ハ
徐ハ山賊。よ。知ら。か。躲て詮。察のどく。吾俗を左馬
頭直冬。渾家と喚。飛鳥前。余ハ言。女兒韓夜。前
夜香炉の山中。追隊。小圍。よし。何地往け。行參。
知ら。況て探題の邱と。鏡と。の。更ハ。女子の吾俗。争
る。

知るべ。雖も恐も。ひ。身を。敵。敵。犬自物。疾砍。と
身を寄せ。覚悟。と。死。懼。是。女子の心根
見。良。這形勢。六。忽然。と。眼。志。喧。悍
を。良。之。余。命。入。ト。と。先。引。導。渡。
得。き。ん。益。ミ。ク。け。う。媛。と。二。品。斯。ても。言。遞。与。き。と。敵。圍
ち。く。罵。示。腰。佩。大。刀。拔。内。飛。鳥。前。の。眼。前。近。
指。つ。る。吐。嗟。憶。必。死。の。勢。准。備。の。懷。劍。拔。合。最。
牛。弱。き。拳。一。念。凝。一。砍。ひ。鎌。六。生。焦。燥。て。云。小。
怜。俐。言。ひ。那。懷。劍。落。き。と。右。手。よ。拂。ふ。外。
飛。鳥。前。の。乳。下。尖。あ。く。砍。込。叫。一。声。喚。拂。ふ。尾。
居。不。撞。と。殻。み。是。ハ。と。駭。く。鎌。六。及。の。下。飛。鳥。前。ハ。

一枝
貞
村
功
得



二 仁虫音錄卷之二

苦しき息を吻とつきて。嘴口惜や愁めし。匹夫下郎の手ふり。至
敢みく絶ゆ。玉の緒と隣む人も夏山の露と消ゆ。身の果は素
より覺悟のうゑう。胎ふ乃する愛子を閻々。閻ふ這世う。遺
悲しき残惜の名残ふ。一眼良人や児ふ逢ひ見る。工も蔓萩の乱
たる世ぞ恨わしや。と憶ひ絶てす。又更ふ想ひ。工も血のうき。血
波と俱ふ諸膝ふ落て流もく。溪河ふ紅葉散へ。たゞうき。鎌
六を飛鳥前。苦みゆ。顔を毎せ。左視右視。う冷笑ひ盛り。八
些一過。豆ども。夏山蔭の晚櫻。白ひ残りく。最床。うき君と懷と
世ハ生憎ふ。かゝ。隨意うね。習俗。斯まを虛骨折らせて。媛が
在家と招了ぬ。又今更ふ詮術。う。良人とやうん子とやうん。
最未長く冥途で添へ。たゞ言草の種。一も竭う。骨折序ふ。這

世のいと先と。せんと咳き。復端麗を。又の下ふ。哀景。敢うや
咱が名の。ひをうも。俟て。今日と散る。夏の山辺の女郎。花秋を。みくも
嵐して。ひみ。首ハ落ふけり。為て。やうめと。鎌六が。片頬ふ。咲く。飛
鳥前。の。やうめと。死骸を引寄せ。左右と。索。ども。探題の仰
御鏡も。奈何。うけんぢ。さまだ。鎌六。只忙然と。明く。口と。塞
ぎもひ。呆。と。する。をうり。案下後方。声。うり。と。鋼鉄の鎌
六出。う。豫て密意を。做。と。と。飛鳥前。討取る。う。俺
眷念せ。二品も定。と。年ふ入。と。つ。う。ん。赤松刑部大輔貞村が。
去來。請。撈べく。と。云。件の十字堂の扇と。裡面。う。颯と推。解く。
顕。き。出。う。一個の。魁将。皂羅沙の。獵裝束。ふ。紺地の。錦の野袴
着。う。覆面。あ。忍頭巾と。左手。ふ。携。て。徐々と。援。先ち。歩く。

寄るみど鎌六ち意とたうり身をひるぐれしも誓願しらまが血刀並
鞋みおきゆく飛鳥前の首級を取りぬけ恭々と貞村が傍ふ措て
儲りゆす。おん憑の故あり計較をもつて飛鳥前の首級ハ採り
得てひへどもあん莅の二品ハナクふ集めが懷ふと睨みん空眼ふく。
一品ふも手ふ入ふ是の遺憾ふいとよみ貞村うち領む。俺
輪笠の城落去の折ふ三郎満祐が先と踰まと直冬が首を取
得ざる。姫とびきとびきとびきとびきとびきとびきとびきと
意を示そく心を保つ飛鳥韓衣及び印鏡二品タリ。今も
一個と討得しまだ是貞村が一個の大功。是ゆく憶念那二品。
韓衣姫と所持ある。此うふとも計較をなす。姫侶俱小
二品を取得て俺ふ遞与ね。汝への恩賞ハ後日ふ重く宛行

完割符の鑑札受取よとふと當座の寝具と割符小副
一色の黄金とをも授宛ゆ。鎌六とと請願き。手を早く肌
を着たりけ。恁る折も相圖やむりけん。這所の杜蔭那首の
溪間と一群五名三名ぐ頤を出くろ。頭の從兵貞村ふ扈従し。し
かん迎ひぞうと喚き。を貞村完介とうら喰て大笑ふと鷹揚ふ
前後左右とうら圍せ。成儀堂々と遂邁け。有右べーとも神
きくねば。知らぬ安井の虎王が辛く虎口を砍脱て飛鳥前のかん
迹をと心ふと遅く馳来る。俊小瓜突く尻怪ミ。急ぐ熟々視
其軀のくみく首級へひらねど繡箱へくる衣服の摸様へ見分ふ
ずもひづき。と内君の御最期と胸潰すとよく騒きしが四邊に
倍と見よ。前路ふ徨ひ怪しき漢子。倍ハ駄歎者。をこし。年

捕めせんと身ひどぞ。跳蒐さかうと鎌六さかくが肩先あたま廻まわし引ひと身を奮ふる。解ほて鎌六さかくが刀の柄つかを身後みうし保もり抜ぬけせせを附つ入りと小手こてと
搦なむと臂へ骨こつ落おちし。迄ご小劣さらぬ早速さの煉磨れんま結むすぶとやぐと右左
別わかれと須臾すゆ身構そなへし。一回いちふ端嚴ばんげん刃のの光ひり丁々てい發矢はと轟合こうごう
時ときふ曉雲あけくも嶺ねふ雪非ゆき徽ひ東ひがしの天あまふ西にしきくと朗はふ看みゆる互たがの面体おもて
虎王こくりゆう得えと踏ふ込こ々忠義ちゆうぎふ烈はと尖とハ當ありぐとや憲けんひれん
透とおと見みをま一鎌六さかくを閼なりと飛び込む溪せき間まの喫逃きつとうとせトと
虎王こくりゆうが繞まわひと飛とと做つくと身み憶おもひと樹根じのねふ足あしふくろけ。俺わ
身みらうと最さい深ふかき溪せきへ落おち入り形容ようを覆おおきふ朝霧あさぎ
窓まどと視みへぞぞ小けり。浩所こうしょへ麓あしづの方ほうより菅すの小笠こがさと首くびの頃とき
腰こしふ二口ふたぐちの刀と佩つ奈良木綿ならもの草衣くさぎふ。かみド絞くわりの脚く

半ひと着つて深緒ふかの草鞋履くつをもつて三十餘さんよの一個いつの行客ぎやく來く
くとまゐる虎王こくりゆうが只管ただまん國くに戰たたかふ。果とも迄と深谷ふかの中なか
跳とり入りて縛との身みを這方ながの木木蔭かげふ窓まどひ居ゐ。懷いだひひと
あらひやひづけん飛鳥前とよの花はな映うつの邊へり途とく找さみより嘆息ためいき
はく其その併ひ立たつも得去とらで對たい居ゐ。必竟ひきん件くだんの旅客りょ客きが飛鳥前とよの
軀からふ寄よて又甚麼なにをすうを。开あせ今いま説説すと欲ほすのと。後あと
二輯ふたの牌ひふりうて出でせ。兎との腹はら縛とひだ。這首このふーも具もと甚ひと読客よき
宜よく察さ一ねう。兩話休題りよ譚たん分わけ兩頭りょう偕かい。足利庄馬あしか直ただ久ひさへ
今こ總應永七年じゅうの五月廿つ日の露あと俱ともふ因幡國いなば輪笠わの城しを攻う
亡なび失う。追討使ついとうしふ對ひふ赤松兩家あかまき貞さだ村むらの下し知ちと。日ひり
治さり民みんの捉つか儀ぎふ執つか行はひ。恁なて六月上旬じゆ兩將りょう京都きふ帰か陣じんと

勝軍の赴きを前後奉安ふ听へひと是に上下の感賈大ききど直小營中へ招昇す。尚も精しく軍の事をかん索ねむる所去る五月の央より相國義満更懸りて。おん心地例もさう一か。這月ふ到りて。あん恼ミ頗りふゝ。昼夜人事せ辨へかひ。是ふ做て執政の人々左右の評議區々ある。猶生憎ふ管領の棟梁斯波左京大夫義重ハ春の頃より所勞少く縛を預り聽を協つむ。仍て嫡男侍従之助義淳のよど壯年うゞぎども父代りて泰候を副管領右馬頭頼元ハ故頼之の轍を踏て規律正しき人を慕ひ。這もまた三十ふ充ざむ。斯波義重と矩踰て吉良を執事せ共ふ在らぞ。只管領の列座宣べ。お日の廳の出加り。縛の仔細を訊問ゆる當將軍義持朝臣ハおん稔十五歳ふゝ。去る応永元年

きりける冬十二月某の日ふ左近衛中将ふ任ぜりと禁色昇殿を聽く。うゑみ征夷大將軍ふ補せり。その牒おん歳九歳。うゑみ。什麼這君ハ前將軍義満朝臣の長男ふしと才智大人ふ矩。うゑみのミス文ふ長ド武ふ剛。うゑみ。才智大人ふ矩。うゑみ程ふ室町の營中より將軍御着座在せ。細川頼元。斯波義淳其他在京の諸大名。悉く參候り。威儀整々と列座せり。當下赤松貞村ハ直冬が渾家飛鳥前の首級及直冬所持の米配並ふ兜を分捕あつた。併ふ君前ふ備てひよ。某大手の大將ふ擇ミ出まくり甲斐ふ卒直冬を擊捕んと找對ひ。放り箭ふ正一く射とあそり。之ども乱軍の中からひよ。了ふ首級を得たり。今ふかく遺憾ふ絶ぜ。遽莫塊と采配ハ某が手ふ分捕し。飛鳥前

え擊得レク。実檢ふ備在り。賢慮奈何と誇貞ふ演。三郎
備祐も侶ふ小膝を找。某城の搦。より衆ふ先立て
乱入り計較をりつて直冬セ。一箭ふ射ともりひき。仍て首級。實
檢ふ入をす。と齎來リ。首桶を席ふ找。對居。這兩將の
訴ふ將軍。及初も。まうり。両管領も列座の諸候も。俱ふ眉根をうち
顰。車て尚判。よもやうざう。が。ま。中ふ頼元ハ義淳ふ眼と胸。扇。左
膝ふ脩。ゆ。心獲。が。死。二公の辞射。と。首を。舉。る。り。先登。拔駆。軍の
故実。射。る。ハ。二個。首級。ハ。一箇。全く。功を。争。ふ。似。う。何。き。ふ。其。
日の形勢。擊入の。衝。と。詳。ふ。听。ん。疾。々。と。問。ひ。き。貞村。さん。い。鄉
ゆ。听。へ。ひ。げ。り。と。某。大。の。大。將。と。と。争。り。手柄。を。他。ふ。讓。ん。
と。自。陣。頭。ふ。駒。を。も。す。稍。本。丸。を。攻。入。り。敵。の。腹。心。股肱。の。類。

族残り少く討捕へぐ直冬も今ハリモ是まをさりとも憶ひけん。
ちや陣没と見ゆるみぞ斯と知るより某が覗ひきを放り笠崩ふ咽
輪を射らきて須臾もまもぞ仆そとをうせ馳寄て首を採り思へ
ども乱軍うちで歎躬方ふ推隔速らきて俺ゆもひくに躊躇うちふ
満祐首を得らきけん然ハひき兜と采配を分捕しくにが正しく射
ちあし證據ふことをと座すの辞ふ満祐ハ堪ざ席を薦出今貞村の
言ふととろ某つやく其意を得ど嗚呼、ましくハりども吾脣若輩
きりとゆく。搦手の大将ようと些一く羞るとともひく大手の大将貞
村より一稜倍する手柄せせんやと豫て問者を容措り謨識する。兩
道より忍び寄る大庭先直冬手甚く鬪戦とろと蘇鉄の簾より
闕窺くとも覚の一箭ふ膝口を毘深ふ發矢と射貫きと瘡ひを得

仙史奇譚卷之二

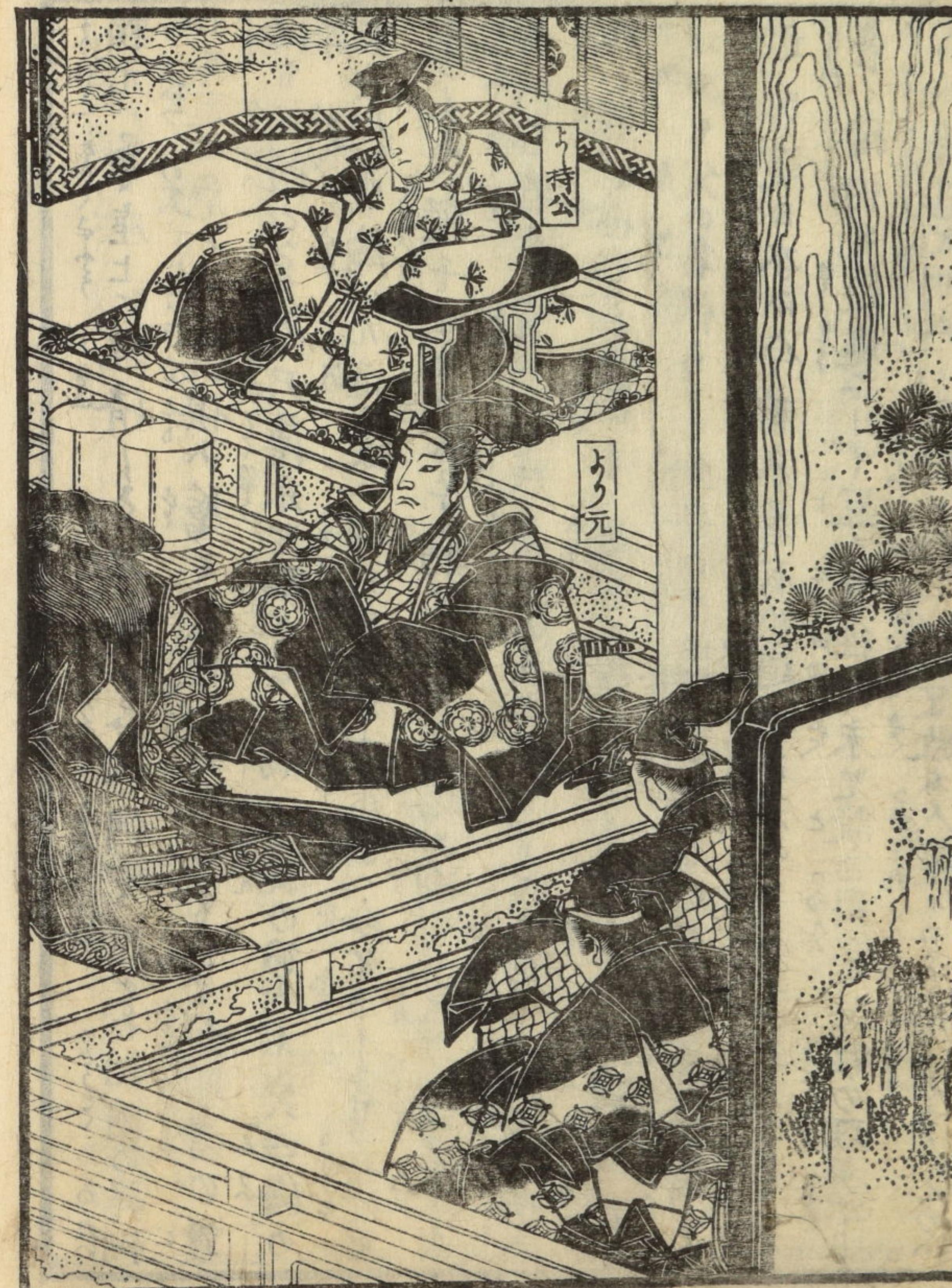
たりと飛蒐て忽地首を揚げた。遽莫兜と采配と櫻ふの間に立つ
ざう一人緯倉卒の折るいなき。這矣ハ賢察のとと陣辭ハ甲乙
俱小理ううどとりよ支うけみだ。頼元是非の判断ふ及むと首を出ぐ
默然とうじが義淳要時沈吟て某愚意をわづらを不貞村ハ直冬が
咽輪と射あひとりひ満祐ハま膝口を射着うりとりよく、兩個
迭か矢壺違ア宜しく首級を実檢し。咽輪ふ矢疵の有无を
試てを余るべからん。とふふ頼元感嘆して开ハゞく意著是ア先
実檢と立寄ると將軍要時と禁やゆひ叛逆たりひうぢり嫡庶の
好ミ浅クぬ直冬一家の死差ハ血で血と洗ふ祖先へ不孝只矢疵を
のミ改て両将が勲功の優劣を沙汰走。直冬夫婦二级の首ハ厚く
葬り余るべーと仁慈の誕意ふ義淳ハ直冬が首引寄せて頼元侶俱點

檢あるふ現貞村が言つたがどく咽輪ふ些の傷痕に尤矢疵り砍
疵り定くふ解よ。ひづねども兜采配分捕せ。ゑハ矢疵の脅合をも
のミウハ飛鳥前え轍ひ捕う。其功殊更莫大き。滿祐ハ首を得とど。射
著しより。軀うけみだ今更證據とあるよ。然まみだ死首得つて脅一
素よう賞の疑ハ。重くをとひる古語ハひるほど相。罔異例小済らせ
タバ开ハまと他日ロ沙汰ひる。且貞村歟。這回の賞ふ因幡國ゆて邑美氣
多の二郡を宛行ハ。さうのう。國制と儀ふし。かく直冬が残黨を草と
分うて糺明。努力々怠慢をうむ。と將軍の命と傳るふと貞村眉目を
ハどこへ思と謝して退出ける。満祐ハ満座の中ゆく。頻りふ面目を失ひ
けまば。這日都下の邸み返りく。心中更ふ安うひ。獨熟懐ふゆう。
嚮小那首を得よう。と死洗ひ清ゆく。改め見一。と咽輪ふ些の

癡も々々実檢備ゆ。まざハ最大切う。首小一りをと。昨日
 までも今日までも守護と嚴しく。おつて。那痴あり。心得ね
 と左の右憶べと思ひ。是より痡と披露し。再室町へ出仕せど。
 うち籠りその居う。斯等閒め転る。うら恩賜の沙汰ハ
 ゆく歇て照日も強き水无月の季も僅あらゆく程ふ殊更
 苛き。今茲の劇暑ふ相団の山病惱日ふ倍夜ふ懸重らせり。
 危駕の症と看へ。人々只管駭き惑ひ。鍼灸藥餌りへ。
 さう。諸寺諸山の僧徒ふ仰そ大法秘法を執行ひ天地ふ祈り。
 神佛ふ願言。昼夜灵応を仰く。とりども毫毛うも驗る。御
 脳ハりく暮りけり。とぞうふとく夏も過ぎ。今日さん文月朔日の
 当賀の爲。とく參候ゆ。在京の諸候列座の折も管領細川

頼元ハ屢々座上と祝済。甚麼ふ各位何う思を。相団の異例
 の。追て危く飲食俱ふ薦み。余べ名医も七と捐驗者の護
 法も画餅と。只薄氷を贈が。倘凶變の。四海の
 歎き。何少諭へん。這う。ハ俺日本の六十余國へ令を下す。良医の
 びん。又。縦千里を隔ると。躬を厚ふ。薦め。夫の治療を乞ふ
 奈何各存ぞ。旨ひ。疾稟出ゆ。と。言ひ。竝居る諸大名迄
 眼と眼を合ひ。誰も思慮と陳る者。中。斯波義淳ハ
 這日も父の名代。列座の中から居し。列を放て。找出俺。近
 曽。這日本の今昔未曾有の道士出来て。自。灵泉道人と号す
 普く海内外を逍遙。宜く既往行未を説き。因果應報の理を示す
 吉凶侮吝と明ふ。瘦と愈し。苦と救ふ人是なり。神僊たり。

仙螺奇錄卷之二



出沒所と定めど其栖と識更々一或ハリム這道士幼稊頃よりして
深く比宸尊星と崇信一妙見宮の感應を得一より神通殊ふ自在
きりとを冀くハ人と撰ミテ僑居を听乳一那道人と請迎て相國の病
惱且ハ治療の是非をも問ひ奈何ゆべからりとひを頼元聽ひて憶
を小膝を當とうち某も那神僕を听えり。這人ひりと忘れず速ふ
使と馳て頓ふ在家せ需みんとりひ辭ひ果ぬふ忽地傍ふ声ひりと
壺裏乾坤別う。但視る鶴髮童顔。自然の清高僕姿の氣韻洋洋
とて四下とぞひ素紋紗の淨衣のうゑふ鼠色の道服せ着一右半ふ
七星の形象を摹せ一皂謀塗の團扇と携へ席の中央ふ座を占ふ
是則別人きりと矣泉道人ゆく在せ一矣淳頼元驚嘆一り。稍額

衝うる首を擡げ今這方より使を馳てあん在家を索ね覓り狂く
來駕と請ひせし。斯速き來訪ハ意外の大幸謝む堪ぞと
謹みて舒るゆ。道人威儀を正一ゆ。相國の異例ハ危篤の難症。國
家の係る事ハ政事。預る各位の焦慮然と想像。抑這
間のあん惱ハ是尋常の吏をも。今明ふ前因後果の由來をひと示し。
瘞の浅深苦惱の輕重治不治の所以と論び。俺嘗聽る吏ひり。義
滿朝臣未生のと先前々將軍義詮公四十のうゑを踰ゆども。世縊ひと
患ひゆ。神ふ佛ふ願言して懇望頻々折り北の方綾の臺臥。孕
ゆと听へ一義詮朝臣ハりゆもまうかり上下の怡悅斜ら。程ゆく
十月ふ充るとき。産の催り。寒熱強く痛苦劇しく日夜小内へ
苦を受ど一七日ふ及ぶまぐ更ふ生る。形容躰。其頃天下ふ周

旋して生と死と起と古今未有の名医なり入らずて南陽子と
称ふ。ト識者ひりて報ざるふぞ。恥て南陽子と嘗中ひ招ひそく療
養と委ねゆバ。陽子熟綾の墓の脛脉を看察し額然と大喜ふ。
駆き今倘半日遅うせば母子俱ふ救ひざう速く俺鍼術とく保
胎の法を施さん。胎子ハ容易産かん。遮莫かん母綾の墓ゆ忽地落
命為かん。且母君を救ひんとせば胎子ハ須臾ふ虚しくうつべー左孕ハ男
子と俗の常言ゆもりひうるを廢るハ惜き限りうづぎや。親を廢て子を資
す。児を失ふ。親を救ふ。一得一亡夫も又時遅どう。母子俱ふ救
はん術ハ只ぞ速く決断ひり。二箇をうち愆もみと理を説く。瞭然うる。
明きうござとりひ立支きけど。君臣俱ふ醉ふ。其ひ所を知らざつける。

天竺仙蛙奇錄卷之二

良

德

龜

